

被災地や被災者に対して 「個人」や「法人」として 何ができるのかを考える! Part-2

本稿は5月号からの続編です。筆者・山口泰信氏は、4月11～15日に支援活動のため被災地に入りました。そこは何もかもがひっくり返った、「想像を絶する」「信じられない」世界であるとの連絡が編集部にありました。復興に強い意志を持つ人々。前を見られず立ち上がれない人々。そして、残念ながら命尽きる方…。一人（一社）の力は小さいかもしれませんが、この報告レポートを一読し、今、何ができるのか、何をしなければならないのかを熟考していただければと思います。

株式会社山口総研 代表取締役
日本災害情報学会正会員
日本防災士会正会員

山口 泰信

URL <http://www.bcpjapan.jp>
E-mail info@bcpjapan.jp

東日本大震災 現地レポート
<http://www.tamatebako.com/yama.html>

被災地の現状

食事は仙台では手に入りますが被災地では、お店が開いていないので何も手に入りません。避難所には今のところボランティアに受け渡す寝場所や食事はありませんでした（4/11時点）。

被災地では5月の連休にかけて、県外ボランティアを受け入れるように働きかけている最中です。

県外ボランティアを多く招き入れる理由

- ・ 若い人が増え避難所がにぎやかになる。
- ・ 同じボランティアが同じ避難所に何度も来てくれる。
- ・ 何度も来てくれるボランティアは要領を得ているので、活動がスムーズになる。
- ・ 復興した後も、第二の故郷のように被災地を愛してくれるようになる。
- ・ 仮設住宅に入った後も、ボランティアの応援があれば孤独死などを防いでくれる。
- ・ とにかく県外ボランティアは勇氣の証。

実際、阪神大震災でボランティア経験した私の場合、神戸生田中学に被災者の皆様と一緒に植樹もしたので、今年に1回ほど見に行ったりしています。結婚式も神戸の地で行いました。このように、復興した被災地に再び足を運んでくれるのです。したがって、多くのボランティアを受け入れることが重要なことです。

また、ゴールデンウィーク期間中は、多くのボランティアが支援してくれませんが、その後、夏休みまでの間、被災者と少ないボランティアで運営の維持をしなければなりません。現状でも被災地では、泥のかき出し、仮設住宅への引越、避難所や自宅の整理整頓や清掃、畑を元に戻す手伝い、話し相手、パソコンの指導、リクリエーションの歌や芸や体操など、ありとあらゆることで手が足りません。いずれにしても、復興してくと避難所内で避難者自ら行うフェスティバルなども開催されるようになります。そうすると、県外ボランティアによる様々なアイデアは有効に働きます。継続できるの

特集企画

史上最大の危機対策その2



石巻港近くの風景。いまだに海水が引いていない部分もある（宮城県石巻市）



鉄道路線は復旧のめど立たず（宮城県石巻市）



石巻市渡波小学校にて。避難所はやはり過酷な空間です（宮城県石巻市）



昼食の配給風景。何でも行列で並ばないと手に入らない（宮城県石巻市）



津波で泥だらけのランドセル（宮城県石巻市）

先生たちと近所から避難してきた大人たちで、ドアを必死に押さえた。他の人は、ステージの上や中二階へさらに駆け上がった避難。外は2メートルの津波、完全に引くまでの数時間の恐怖体験は一生消えない。学校の先生たちはよく世話してくれた。

今後、どうしても外部からの長期的な支援が必要です。「一度義援金を送ったから終わり」ではなく、継続的な支援をお願いします。

避難所でお聞きした話を箇条書きで記します
・子どもと親を体育館に避難させた後、自宅に車で戻り、そこで津波に遭遇。首まで浸かったが奇跡の生還を果たせた。
・児童を体育館に避難させて、そのままドアを閉めて運動場の地面から2mの津波をしのいだ。先生たちと近所から避難してきた大人たちで、ドアを必死に押さえた。他の人は、ステージの上や中二階へさらに駆け上がった避難。外は2メートルの津波、完全に引くまでの数時間の恐怖体験は一生消えない。学校の先生たちはよく世話してくれた。

・市役所の対応が後手後手でよくない。
・家財道具はほとんど流され、身の回りの物しかない。
・仮設住宅に早く入りたい。
・早く洗濯をしたい。
・自衛隊が小船で沖に停泊している船まで連れて行ってくれ、風呂と洗濯をさせてくれた。
・ボランティアのマッサージや心のケアなどが回ってきてくれた助かった。

被災者からお聞きした話

は地元の被災者ボランティアなので、県外ボランティアの協力得て推進していくような形を取ればよい方向に進むと思います。
避難所は仮設住宅に入るまでの一時避難所ではありますが、長期化する中で、その環境を出来るだけよくすることは必要なことです。

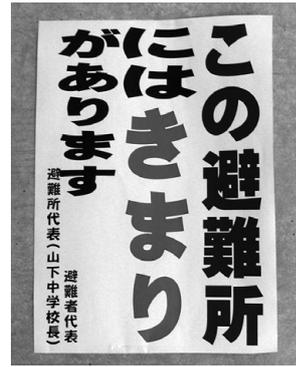
・学校の各階の水道やトイレは使えない。使えるのは1階の水道と仮設のトイレだけでつらい。
・避難所で、自立した自治を行なえといわれても、資材も人材も不足しているので手が打てない。
・東京や関西方面から仕事の話が来ても、子供のことや親を置いては動けない。
・原発のことも気になるが、目前のことで精一杯でどうしようもない。



通信や伝達の受け渡しも各部屋ごとにスムーズに分けられていました
(宮城県山元町山下中学)



避難所では、布団をたたむ事を朝の日課にします。秩序の始まりです。避難所生活の中での毎日の整理整頓は、生きる源になります
(宮城県山元町)



きまりは重要です。ここ、山元町山下中学は、校長、避難住民の各部屋から班長副班長約40名で毎日午後6時から会議、午後7時から10名で幹部ミーティングが開催されているそうです
(宮城県山元町山下中学)

5つの短期的支援

①「野菜ジュース」を送ろう

避難所では、新鮮な野菜が不足してほとんどの方が便秘に悩んでいます。その解消につながると思います。

①の注意点…必要な理由も一緒に送らないと、単に配布されるだけで便秘予備軍の人に行き渡らない可能性もあります。用途を明確に述べて送らしましょう。

②「洗濯機」を送ろう

服は瓦礫除去作業で泥だらけになりますが、使える洗濯機はほとんどありません。まだこれから数千台が必要になると思われます。中古品でも避難所で使えます。

③「自動車や軽トラ」を送ろう

洗濯機と同様に使える車がほとんどありません。

④「船」を送ろう

船の9割が使用不能となったので漁船でもレジャーボートでもかまいません。被災された漁師の方

は、「まず船に乗りたい、海に出ることでやり直す勇気が湧いてくる」と言っています。

②③④の注意点…物的支援、輸送設置支援、輸送費の支援の3種類があります。大物を運ぶ際に、付随した形で洗濯機を積んでいくのがベストです。

⑤「オレンジのスカーフ」を送ろう

オレンジのスカーフは、ボランティアの愛と勇気の印です。身に付けると被災者との見分に役立ち、責任感も高まります(全方向から視認できるように身につける)。また、被災者へ安心感を与えます。避難所や被災地で活動するボランティアは、プロではありませんが大活躍します。

この「オレンジスカーフボランティア」は、どこかの団体に所属するとかは全く関係なく、これから世界中でボランティア活動する際に身に付けていただければと思っています。そして、各地でスカーフにサインをもらい、復興の軌跡として大事にします。日本から世界に広げるオレンジスカーフボランティア

イアネットワークです。布にマークが入っているとか文字が入っているとかも関係ありません。

現在、筆者はオレンジスカーフを作成中です。店舗やWeb、被災地で販売していただき、売上は、避難所の運営費や仮設住宅の自治会運営費用に充てられます。経済活動ができない地域や、予算も割り当てられない部分やエリアへの支援にも充てる予定です。

筆者の周囲では、さまざまな支援活動に参加する仲間が増えていきます。軽トラ、洗濯機、マッサージチェア、野菜ジュースを既に支援しました。この支援には、大阪の福泉小学校が活動に参加してくださいました。

今後の対応を考える

東日本大震災においては、多くの問題が山積ですが、次の3点について特に考えさせられます。

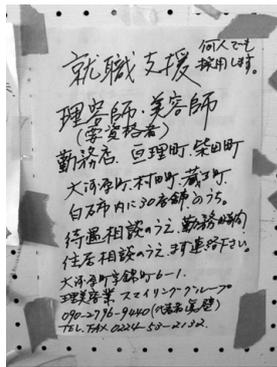
- ① 物的支援
- ② 雇用創出支援
- ③ 脱原発を見据えた新しいエネ

特集企画

史上最大の危機対策その2



山元町は有名ないちご産地だったそうですが、ほとんどのビニールハウスが流された中、ここは残ったそうです。津波の土を全部外に出し、苗を全部入れ替えて再出発。やる気はあるが、人手不足だそうです（宮城県山元町）



就職支援の張り紙。被災してない地区からのありがたい支援です（宮城県山元町）



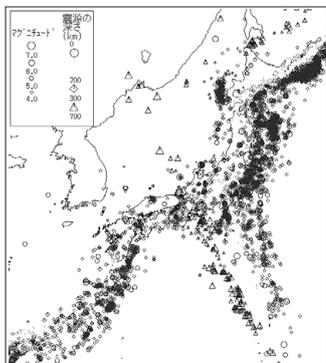
この山元中学のトイレは、向きがそろっており感激しました。普通でも難しいことなのに（宮城県山元町）



子供たちは外で元気よく遊んでいます。心救われる風景でした（宮城県山元町）

ルギー生活を国民を挙げて世界に発信
私見ですが、（原発関連の仕事に従事されている方々には申し訳ございませんが…）防災士の私としては、③が一番大切なような気がします。
原子力エネルギーを完全に制御できない、完全廃棄に何十年、いや何万年もかかるかもしれない現状では、今現在の資源として利用するのではなく、もつとずつと未来になってから有効利用できる資

日本付近の地震活動（1990～2000年）
出典：気象庁ホームページより



源なのではないかと思えます。
左図の「日本付近の地震活動」にありますように、日本中が危険地帯であり、建築物は地震・津波・噴火などの自然災害に対してあまりにも無力です。ご存知のように、原子力発電所は全国にありますから、自然災害の対策だけでは足りません。地震の度に原発の放射能漏れのリスクが高くなるので、今後は、防災計画やBCP（事業継続計画）の中に放射能対策を盛り込む必要があります。
私は数年前、「発明起業塾」の藤村靖之先生と、モンゴルに非電化冷蔵庫を支援しました。モンゴルで手に入る素材で、モンゴル人が修理でき、モンゴルの経済で無理なく維持管理できる冷蔵庫です。

支援お問い合わせ先
NPO総括工房災害支援
プロジェクトマネージャー
株式会社山口総研
代表取締役 山口泰信
<http://www.tamatebako.com/yama.html>
<http://bcjapan.jp>
E-mail ty_house@yahoo.co.jp
TEL 090-9613-7137
毎月第3週は被災地に訪問予定です

日本でも、このように電気を減らしても快適な生活。そんなことが出来ないか真剣に考えてみてほしいのではないのでしょうか。
私たちは助け合いながら、目の前のこと一つひとつを、コッコツとやるしかありません。そして、皆様からの支援に心より感謝するしかないのです。これからも、どうぞ被災地を暖かい目で見守ってください。
読者諸氏におかれまして、何か被災地のために支援したいとの声がありましたら、是非とも力を貸してください（連絡は左記まで）。